

【2RF-1502】エコ・リバブルシティの都市構造モデルの構築とその計画論に関する研究（H27～H29）

氏原 岳人（岡山大学）

### 1．研究開発目的

本研究の目的は、エコ・リバブルシティの都市構造モデルを特定し、その実現のための計画論を確立することである。

本年度は、サブテーマ(1)では居住者の行動及びその意識に関するアンケート調査に基づき、住みやすさとライフスタイルとの関連性を定量的に把握した。具体的には、まず1)岡山都市圏で実施したアンケート調査に基づいて、住みやすさに影響を及ぼす居住環境項目を整理するとともに、その影響度合いを定量的に把握した。そして最も影響を及ぼす「移動利便性」に着目して、都市構造との関連性を分析した。次に、2)岡山都市圏及びアメリカ・ポートランド都市圏にて実施したアンケート調査に基づいて、公共交通整備状況等による移動利便性の差異が交通行動に及ぼす影響を明らかにした。

サブテーマ(2)では、エコ・リバブルシティを実現するための計画プロセスについて、ポートランド都市圏を事例に分析するとともに、岡山市中心部において、実際にまちづくりを進めるための土壌作りを行った。

### 2．研究の進捗状況

#### サブテーマ（1）エコ・リバブルシティの都市構造モデルの構築

本年度の主目的は「ライフスタイルと住みやすさとの因果関係を定量的に把握すること」である。それに対して、1)住みやすさの要因分析（住みやすさに影響を及ぼす要因は何か？）、2)最も影響を及ぼす移動利便性に着目した要因分析（移動利便性は何によって規定されるか？）、3)共分散構造分析による居住環境快適性と自家用車使用量（環境負荷）の要因分析、4)岡山都市圏とポートランド都市圏の交通行動分析（両都市圏で交通行動はどのように違うのか？）の以上4点を明らかにしており、サブテーマ(1)の当初の目標は達成されたと考えている。

本年度の調査研究から、住みやすさには「移動利便性」が最も影響を及ぼすことが明らかになっており、H28年度以降はこの点に焦点をあてて進めていく予定である。

#### サブテーマ（2）エコ・リバブルシティの実現に向けた計画論の確立

本年度の主目的は「環境に優しく住みやすいとされるポートランドの都市政策の内容とその具体的な成果を分析すること」である。それに対して、1)エコ・リバブルシティの形成プロセス、2)市民参加の発展過程、3)都市政策における「公正性」の意義の以上の3点に着目し、ヒアリングや文献調査等からこれらの点を明らかにしている。加えて、2年目以降の岡山市へのフォードバックも想定して、市民が集う西川アゴラを拠点にまちづくりの機運や土壌をつくった。このため、サブテーマ(2)の当初の目標は達成されたと考えている。

### 3．環境政策への貢献

自動車依存型都市構造の弊害や公共交通システムを整備することのメリットを、実データに基づき統計的に検証した。いずれの結果も、人々の交通起因の環境負荷（CO<sub>2</sub>）を削減する政策は、同時に「住みやすさの向上」にもつながることを肯定している。また、そのような低環境負荷型の都市構造を実現するための計画プロセスの事例を詳細に検証しており、環境に配慮したまちづくりのキーワードとして「公正性（Equity）」に着目することの意義に言及している。

### 4．委員の指摘及び提言概要

各種調査に基づく現状の分析が行われ、一定の成果が得られている。住みやすさが公共施設(学

校等)へのアクセスの容易さによって説明されることがアンケート調査(岡山、ポートランド)の結果として示されたことは興味深い。現状のポートランドと日本の地方都市岡山だけの比較のみで都市構造モデルの構築まで作成できるのか不明。将来的には研究対象を他の都市にも広げることと、環境政策への具体的貢献を意識した研究がさらに進められることが望まれる。

5. 評点

総合評点：A